

大学一般体育の考究

(その1 理念)

盛 大 衛

本年4月をもって、金沢大学にも教養部が独立し、専任教官制のもとに新発足した。この機会に、爾来、活発に論議されてきた大学体育の問題点を採りあげ、そのあり方について検討してみたいと思う。

1

新教育制度の一環として新制大学が発足していらい、10数年を経て漸く大学制度を再検討する時機に迫られているといえよう。これらの論議を通して、経済的、ないしは社会的な強い要求のもとに、極度に高度化されてきた専門教育の不足が指摘され、外国語の解読力など基礎的な力が旧制大学のそれと比較されて、その原因が追求されようとしている。また、科学の面で急速な発達をなしたわが国では、科学技術教育の振興という当面の要求に従って、これを政策として強く押し出し、特に大学教育に大きくその任を預けることになった。このような趨勢のなかで、教養課程と専門教育課程の組みあわせが、当然議論の対象におかれることになったといえる。新制大学の根本理念は、専門教育にかたよることなく、広く一般の教養を修め、人間教育を目指して出発したのであるが、これらの情勢は教養課程に一方的にそのしわよせをしようとしているように思われる。とりわけ、体育が基礎科目としての色彩に乏しく、また学者の中の多くにその効果を疑問視するむきもあって、苦しい立場に追い込まれた観がないではない。このことについては多く反省されなければならないが、その原因について考えてみれば、大学における体育の実績が教養課程にはっきり示されなかったことにあると思われる。他の学科でもみられた傾向ではあるが、体育も例外ではなく、いきおい専門教育に重点がおかれ体育の専門家の養成に力がそがれた。また、教官数の劣勢は教養部の学生数の規模におされ、施設の不足も手伝って充分に効果のある系統的な指導がなされなかったといえないだろうか。

これらの過去の事情は、理論的に体育の必要性を認めていても、現状にたいして疑問をもつ人々をますます多くした理由になっていると思う。まして、日本における体育の発展の過程をみれば、なお一層明らかで、結果についての評価に耐えうる実績を残さずして、論理的にこれらの疑問をとり払うことは困難である。すなわち、学校に発展の過程をみるわが国の体育は、欧米体育の模倣に始まり、長い形式的な体操時代を経て、漸くスポーツの時代が芽生えようとする間もなく、軍事教練の具となる戦争時代に入ってしまった。戦

後は、大学を人間教育の場と考えるアメリカ式の教育理念に従って、制度も内容も大きく転回せざるを得なかったのである。そこには自然で自由な体育の発展は望めなかったといえる。加うるに、知的な活動を尊ぶ伝統的な大学の考え方が、日本でまだ十分にその基礎をおろさなかった体育の進出に抵抗を感じたこともまた事実のようである。これらの不幸な事情が、新制度における教育効果の批判に押されて、根本理念の検討が充分になされないまま、制度上の問題、さらには教養課程の内容に、また単位制度の問題にその責を帰そうとしたといえるのではなからうか。

大学を含めた戦後の学校体育が、この大きな変遷に抗しきれずに幾多の問題を残したが今ここで、大学体育を反省するばあい、少なくともこの根本理念の前提にたたなければならない。それは、体育に限らず、根本的な大学の目的とするところが問題であるからである。

2

大学には二つの使命があるといわれている。一つは、文化の継承と創造の場としての知的な研究機能であり、他の一つは、民主的指導者を養成するという教育機能である。文化的中心としての大学の使命は、過去長くその責任を果してきたといえよう。しかし、今日の機械文明の発達は、極めて高度な学問と技術を要求し、極度に専門化していく傾向を示している。これによって専門に偏した人間を形成する危険を招いたといえる。専門の分化が進めば進むほど、一般的な教養が必要にならざるをえないようである。少なくとも指導者たりうる資格は、専門の知識の上に人間の様々な要求に対処して問題を考える態度、人格が要請される。一般教育の目的も当然ここに求められなければならない。単に広い教養を身につけるだけでなく、あらゆる問題を正確に認識して積極的に解決する方法を学びとらなければならないのであり、さらに重要なことは、人間を全体として把握し自己形成に努めなければならないと思うのである。国家的要請のみの教育であったり、学者の養成に徹したものでなく、大学における教育は、民主的指導者たるにふさわしい人間教育を目的とするところにその任務と責任があるといってよからう。これらは基本的にはアメリカの教育理念であるが、伝統的なヨーロッパの大学にも浸透しつつあり、世界的傾向として認められているようである。

日本の新制度における大学の教育も、この人間教育を目的として出発した。全人としての人間形成を目指すとき、現代における生理学、社会学、心理学等の各分野で、人間を有機的統合体とみなしている事実注目しなければならない。それは、限りない可能性としての個人であるばかりでなく、社会的、情緒的に環境に即応した全体的人間として把握されているのである。これらのことは、ギリシャ時代に求められた知的、社会的、情緒的、身体的に調和のとれた美を求める全人としての教育をその根底におかなければならぬこ

とを教えている。たしかに、過去何世紀にもわたって、教育が政治的、社会的、経済的影響によっていろいろの目的に用いられてきた。それ故、確かな基礎の確立が困難であったことは容易に想像できる。しかし、現代に至って、政治的、社会的機構が異なるようにその制度、方法は異にしても、科学的根拠の上になつた人間の本性に関する哲学は確立されたといつてよい。すなわち、教育が人間形成を目指すならば、もはや知的、精神的な面と身体的な面とを分けて考えることはできなくなったといえよう。体育が身体教育にとどまることなく、身体を通しての教育となった所以もここにあるのであって、情緒的安定、人間相互の関係、集団行動などにその顕著な効果を期待できることは多く証明されていることである。以上は教育の使命を、主に体育の立場からみてきたが、重ねて大学の目的を考えると、知的機関としての機能と同時にこれらの教育機能を無視して考えられないことは前に述べたとおりである。まして、科学の分野でめまぐるしい発展をみた現代の社会にあっては、社会的性格が強く要求されるのも当然である。そしてここに体育が、身体的発達のもとより、集団の規律、秩序の育成という問題とともに、広く社会性の発達の貢献に耐えうる種目を用意していることもまた事実である。

3

このような信念にもとづいて、大学体育の目標を考えてみれば、それは「現在および将来の健全な大筋活動的なレクリエーションを準備する」ことにあると思う。つまりそれは「スポーツの生活化」であり、ことばを換えていえば「生活の中にスポーツを導入する」ことであるといえよう。

スポーツが生活の中から自由なかたちで自然に発生したヨーロッパと異なつて、わが国では一つの完成された理論を輸入して学校体育として出発した。そこには当然な現象として、理論のみが先走つて実践がともなわなかつたきらいがある。それに加えて、戦後のスポーツの著しい発展は運動好きの特定の学生に独占され、専門化していく傾向を残したといえよう。ここで重要なことは、スポーツの発展に地域社会の体育活動を刺激する重要な効果を期待しながら、現実にはスポーツの生活化という面からは遠く及ばない結果を招いているということである。

このようにわが国における体育の展開が、ヨーロッパに発達した生活の中から生まれたスポーツ・クラブの制度とは違つて、全く逆の過程をたどることになるが、これらのヨーロッパにみられる国民的文化は長い歴史のなかで、政治的、社会的、経済的に独特の発達をしてきたので容易に輸入することは困難でもあり、また価値のないものであることも当然であろう。それ故、わが国における体育は学校を中心として行なわれてきた習慣を基盤にして考えられなければならないのである。

たしかに、わが国における体育は学校を中心として発達したために、大学、高校、中学

を問わず、卒業と同時に体育活動から遠ざかるのが現状である。だからといって、体育活動に対する欲求が減じたわけでは決してない。最も大きな理由は施設の貧困であろう。運動の場所を確保し、さらに用具をそろえることは現在ではそれだけで大変であり、多くの場合は不可能に近いことである。この問題を早急に解決することは明らかに困難である。もちろん体育の専門家は常に施設の問題について積極的に活動しなければならないことは言うまでもない。極論すれば、施設、用具の問題が充分に解決されれば、スポーツの生活化はそれだけでほとんどを解決することにもなるだろう。もっとも根本的な課題ではあるが、基礎はやはりそれらを社会的要求にまで発展させる底辺の理解と積極的に盛り上がる力に待たなければならない。ここにも、将来の指導的立場を築く学生に、広く体育活動を通じてレクリエーションに対する興味を高め、健康的な習慣と態度を養う機会を積極的に与えなければならないのである。すなわち、わが国における体育の現状は、社会的、経済的条件に大きく影響されているが、生活とスポーツが分離していることであり、この基礎を是正することが現在におけるわが国体育の独自の使命でなければならない。大学において体育を必修とする意味もここにあると思う。選択制になれば、ますます運動の専門化を助長し、真に体育活動を必要とする学生を失う結果になり、体育の広い浸透を妨げ、健康的で明るい市民としての基本的国家資産を損することになると思うのである。

4

それでは、このような体育の目標を達成するためにいかなるプログラムを計画しなければならないか。実はこのことが一番の問題である。すなわち、様々な体育の形式は、この複雑な方法の計画に払われた結果であり、あらゆる身体活動から何を選択し、如何に指導するかということが最も重要であるからである。それ故、具体的な計画は、効果が検討されてあるものは除かれ、またあらたな計画が準備されて新しい社会の要求にこたえていかなければならない。このような具体的なスポーツ種目は、新しい研究データによって、成長と発達の結果、あるいは社会性の効果について発表されているが、これらを選択するにあたっては、はっきりした目標がたてられ、それに従って基本的に何を目指していくかを定めなければならないだろう。今、「現在および将来の健全な大筋活動的なレクリエーションを準備する」ためには、基本的な指標として、

- (1) ある程度の基礎体力
- (2) ある程度の技術
- (3) 広い知識
- (4) 積極的に求める態度

が要求されてこよう。

これらの基本的なねらいを常に指導の中核におかなければならないが、実際にスポーツ

(体育)種目を選ぶとき、大別して二つの基準によることができると思う。一つは基礎体力を求める

A 鍛練的なもの。

他の一つは興味につながって技術の向上がねらいの中心となる

B 普及度の高いもの。

将来普及するだろうもの。

奨励したいもの。

である。

普及度の高い種目、将来普及するだろう種目、また奨励したい種目はおのずから広い知識が必要になり、積極的に求めようとする態度が養われることも当然期待できる。これらは大学体育の目標とした「スポーツの生活化」に直接貢献する種目となり得よう。

基準の基本は大別して、以上のA、Bの二群に分けられるが、B群の種目の中には学内の開講が不可能なものも当然含まれる。主には商業体育施設を利用しなければならないものであるが、「レクリエーションを準備する」目標からは特に重要であり、実施の形式、内容が特殊な存在なので、これらをC群として考えることもできよう。

前にも述べたように、体育の形式は具体的な実施の方法に至って様々であるが、この基準の分類によって本年度から実施された金沢大学の種目選択を示せば、次の表のようである。

A	B	C
基礎体力	技術 知識 態度	
鍛練的なもの	普及度の高いもの 将来普及するだろうもの 奨励したいもの	
学内で開講するもの		学外で開講するもの
ボディビルディング 柔道 (男) レスリング (男) クロスカントリー バスケットボール サッカー (男) フットボール (男) ハンドボール (女) 体操 剣道 空手 アーチェリー (女) ボート	バレーボール テニス 卓球 バドミントン 野球 ソフトボール ダンス ゴルフ	水泳 登山 登山の基本 スキー スケート セーリング(ヨット) 水上スキー 徒歩旅行 キャンプ サイクリング
1/3 単 位	1/3 単 位	1/3 単 位

以上のようなが、あらためてことわるまでもなく、これらは現在及び近い将来の教官組織、施設で実行可能なものであることは言うまでもない。

ここで基本的指標にあげられた「積極的に求める態度」は将来に継続する重要なものの一つである。大学卒業後も絶えず積極的に求められなければ、目標であるスポーツの生活化は達し得ない。それには個人の能力に合った興味につながる種目を用意しなければならないが、同時にそれを選択する習慣を身につけさせることも重要なことである。そうかといつて、一つの種目のみを選んだり、あるいは同系統のものに片寄ることは、技術の向上という面から長所もあるが、広い経験を通して選択していく考えからは適当でないので、これらABCの2群以上にわたって2単位を選択させ修得させることにしている。

特に基礎体力の養成は、当面の課題とするところである。単に学生がスポーツを楽しむにとどまらず、この基礎体力を正しい認識の上にならって積極的に選択することが指導の中心にあり、同時に体力養成の度合いが確実に理解できるように指導して、結果において身体的関心を高めるものにならなければならないと思っている。

大学体育は、その期間において体力の向上をはからなければならず、また一方では、経験してきたスポーツを通して自己の生活に適した種目を選択して生活化していかなければならない。大学の教育がそうであるように、技術の習得、あるいは文化的遺産としてのスポーツの理解にとどまらず、常に自己の生活に還元してどのように自分に適した身体活動を築き上げていくかが重要な点である。小学校、中学校、高等学校、大学と段階はあっても、体育においては運動の専門選手をつくるわけではないから次の段階の基礎づくりに専念することができないのは当然のことである。各々は要求の水準こそ違え独立した存在である。特に高校と大学では運動技能の差は全く微妙であるところから、指導の過程が同じになりやすく、高校の延長と感じられやすい。生活に結びつけるという点では、学校体育の共通した一つの目標ではあるが、大学体育の位置づけをあまり広げないで性格を明確にし、学生にもその意識を持たせることが最も重要なことであると思う。この目標に対する意識こそが、将来につながってスポーツを生活化していく基本になると思われるからである。

以上は教養部の独立に際し、遅ればせながら大学体育のあり方を検討し、一つの形式を紹介して批判を仰ぐものであるが、大学の体育が果して実際に効果をあげているだろうかという疑問に、まだ多くの未解決な問題を残しているといえよう。ここ数年来、身体づくりのトレーニングがいろいろな角度から研究されてきており、ある大学では一定の基礎体力に満たないものはトレーニングクラスで基礎体力を養い、いわゆるスポーツ種目に参加できないとしていることも聞かすが、一年半の短い教養期間に、いかに最良の効果をあげるかはきわめて困難な問題であると思う。施設用具の充実はもとより、教官数の劣勢は選択する種目の範囲を著しくせばめている現状である。聞き及んだ数校の大学でも各々多くの問題をかかえているようである。現段階においては、各々の指導法による効果の結果で

必要性を認識させ、個人の最良の方法で積極的な身体活動を選択することが現想ではあろう。体育の定義について、J.F.Williams と C.L.Brownell は「体育は、種類について選択され、結果について指導された人間の身体的活動の総和である。」と述べているがこの意味において、正に認識されてよかろう。

おわりに、本稿では大学体育の目標とするところを中心に述べてみたが、現段階では、まだまだ多くの研究資料によって一層の効果を上げることが急務であろう。4月から始められた種々の測定の結果をまっ、次の機会に具体的成果を問えることを期待している。